実践報告

中上級日本語学習者を対象とした「ことわざ・慣用句」の授業実践

Practical Report on the Course of Proverbs and Idioms for Upper Intermediate Japanese Learners

中岡　樹里（関西学院大学）
Juri NAKAOKA (Kwansei Gakuin University)

要旨

本稿は、中上級日本語学習者を対象とした「ことわざ・慣用句」の授業実践についての報告および考察である。授業は、ことわざ・慣用句の導入および練習を中心に行い、学んだ表現を用いた会話ビデオを作成するタスクや、受講生自身にことわざを創作させるタスクも取り入れた。授業アンケートから得た受講生の反応には、授業に対する肯定的な声が多く見られた一方、タスク等の多さをはじめとして改善の余地があることも分かり、より良い実践に向けた改善案を提示した。実践を経た考察として、日本語教育においてことわざ・慣用句が扱われることは現状では少ないものの、外国語学習の意義という観点から見ると、日本語教育においてそれらを取り上げることには意義があることを述べた。

キーワード：日本語教育、ことわざ、慣用句、創作ことわざ

Abstract

This paper reports and analyses a Japanese language course of proverbs and idioms for upper intermediate Japanese learners. The main goal of this class was to learn and practice Japanese proverbs and idioms. Students were assigned tasks to make conversation videos using expressions they learned, and to create their own imaginary proverbs. At the end of the course, questionnaires about the course were completed. The results show that students were satisfied with the course, but there was room for improvement in the practice such as the number of tasks. Finally, as the consideration of this paper, the value of instructing proverbs and idioms in Japanese language education is stated from the viewpoint of learning a foreign language.

Keywords: Japanese language education, proverbs, idioms, creation of imaginary proverbs

１．はじめに

本稿では、中上級レベルの日本語学習者（大学における非正規留学生）を対象とした「こ

とわざ・慣用句[1]」の授業実践について報告、考察し、日本語教育におけることわざ・慣用句指導の意義とその可能性について述べる。

以下、２章では日本語教育におけることわざ・慣用句指導の現状を述べる。続く３章で当該授業の概要を示し、４章で授業実践について報告する。５章では、実践の全体像をまとめた上で、受講生の反応として授業アンケートの結果を抜粋して示し、実践およびアンケートを通して明らかとなった課題と、よりよい実践に向けた改善案を述べる。また、本稿のまとめとして日本語教育におけることわざ・慣用句の指導の意義と可能性について述べる。

２．日本語教育におけることわざ・慣用句指導の現状

日本語教育の現場において、ことわざ・慣用句が取り上げられる機会は少ない。先行研究においても、鄭(2011)で「外国人向けの日本語教育を見ると、（中略）ことわざはほとんど教育･学習素材として活用されていない」(p.183) ことが指摘されているほか、清水(2011)では、ことわざ・慣用句は全く取り上げられていないわけではないが、学習者の自主学習に頼らざるを得ない状況であることが述べられている。稿者の印象でも、日本語教育におけることわざ・慣用句は、教科書本文のテーマとして提示されるか、文章中に出てきたものが表現として取り上げられる程度である。

３．授業の概要

本稿で実践を報告する授業の概要は以下のとおりである。

１）実施機関　:大阪府内の大学（留学生センターに相当する機関）
２）授業名　　:「ことわざ・慣用句で日本語力アップ」（選択科目）
３）レベル　　:中上級
４）対象　　:日本語・日本文化研修留学生、短期留学生[2]（いずれも留学期間は 1 年間）
５）受講生　　:21 名
（出身の内訳（50 音順）: インド 1, オーストリア 1, タイ 3, ドイツ 2, フランス 3, ブラジル 1, ベトナム 5, ポーランド 5）
６）開講期間　:2015 年 10 月～2016 年 2 月（90 分×全 15 回）
７）学習目標　:①日本語のことわざ・慣用句の特徴を理解する
②ことわざ・慣用句を用いて豊かな表現ができる
③日本文化への理解を深める
８）評価　　:授業への参加 20%、提出物 20%、発表 20%、小テスト(4 回)20%、期末試験 30%

４．授業実践

全 15 回の授業テーマと、授業で取り上げたことわざ･慣用句の例および数を表 1 に示す（取り上げた全てのことわざ・慣用句は資料 1 を参照）。

表１　授業テーマとことわざ・慣用句の例および数

回	授業テーマ	取り上げたことわざ・慣用句の例	取り上げたことわざ・慣用句の数
1	「顔」のことわざ・慣用句	目から鱗が落ちる	9
2		あごを出す	10
3	「体」のことわざ・慣用句	腹を決める	12
4		尻に火がつく	7
5	「動物」のことわざ・慣用句	塞翁が馬	9
6		すずめの涙	9
7	「数字」のことわざ・慣用句	三人寄れば文殊の知恵	11
8		七転び八起き	6
9	その他のことわざ・慣用句	類は友を呼ぶ	9
10		油を売る	7
11	いろはカルタ	花より団子	11
12	創作ことわざ		
13			
14	期末試験		
15	総復習		

第 1～10 回の授業で、毎回 10 句程度のことわざ・慣用句を取り上げた。その際、ことわざ・慣用句に含まれるもののカテゴリー（顔、体、動物、数字、その他）ごとに取り上げ[3]、各カテゴリーにつき 2 回の授業を充てた。

第 1～10 回の授業は、①ことわざ・慣用句の導入、②練習、という流れで行った。以下、4.1、4.2 節でそれぞれについて報告する。4.3 節では授業外タスクとして課した「ことわざビデオ」について、4.4、4.5 節では、第 11～13 回の授業で実施した「いろはカルタ」「創作ことわざ」について報告する（授業回別の実践内容の一覧は資料 2 を参照）。

４．１　ことわざ・慣用句の導入（第 1～10 回）

毎回の授業で取り上げることわざ・慣用句は、稿者（実践者）が選定した。その際、次の 3 点のいずれかを満たしていることを条件とした。また、選定にあたっては汐見(2011)、齋藤(2013)[4]に掲載されている表現も参考にした。

①日常生活で使用する機会が多いと思われるもの
②日本文化や社会、日本語話者の価値観を知るきっかけとなり得るもの
③受講生の知っている言語にも同様の（または同様の表現で意味が異なる）ことわざ・慣用句が存在する可能性のあるもの。

授業では、自作プリント（ことわざ・慣用句とその用例を掲載。図 1 を参照。）を配布、

解説した。表現によってはイラストや写真を教室のモニターで見せながら意味を説明し、必要に応じて「(目の上の）たんこぶ」「千里（の道も一歩から)」などの語彙、「〜ず」などの古い語形、語源についての説明も行った。また、ことわざ・慣用句の使用資格に制限がある場合には提示した（例:「猿も木から落ちる」を発話者自身のことについて使うのは不適切)。このほか、「ルイトモ（類は友を呼ぶ)」などの省略した使われ方や、「出過ぎた杭は打たれない」などの元の表現になぞらえた言い方などがある場合には併せて紹介した。

さらに、ことわざ・慣用句の導入の際には、ことわざの由来についての話を読ませたり、文脈から意味を予測させる活動も取り入れた（4.1.1、4.1.2 節)。

(1)口をとがらせる 〈i〉
例)キムさんは、「あの先生は宿題ばっかりだ」と言って口をとがらせている。

(2) 口は災いの元 〈p〉
例)「いつも、言わなくてもいいことを言ってしまってケンカをしてしまうんだ。」
「口は災いの元だね。」

図 1　配布プリント例（第 2 回、一部抜粋）

４．１．１　ことわざの話（第 1, 5, 7, 8, 9 回）

ことわざについての理解を深めることを目的に、ことわざの由来について書かれた文章を読む時間を設けた。文章は汐見(2011)を参考にプリントを作成し配布した。由来の話を取り上げたことわざを表 2 に示す。

第 5 回と第 7 回では、2 つの異なることわざを読んだペアが内容を互いに説明し合う、ジグソーリーディングの活動を行った。これは、読んで理解したことを他者に伝えることによって、理解を確かめ、深める目的で行った。

表 2　「ことわざの話」で取り上げたことわざ

授業回	ことわざ
1	目から鱗が落ちる、壁に耳あり障子に目あり
5	猫の首に鈴、塞翁が馬
7	石の上にも三年、三人寄れば文殊の知恵
8	百聞は一見にしかず
9	情けは人のためならず

４．１．２　意味予測（第 10, 11 回）

第 10 回の授業では、文脈から表現（ここではことわざ・慣用句）の意味を予測する活動を行った。実施手順は以下に示すとおりである。第 11 回の授業では、同様の手順で「江戸いろはカルタ」内のことわざの使用例から意味予測を行った。

【手順（第 10 回)】

①導入時に教員による説明を行わず、ことわざを使った話（図 2）を配布。

②話を読み、ペアで意味を予想。
③クラス全体で予想を共有した後、解説。

タクヤ「ねぇねぇ、お母さん。新しいゲームが発売されたから、お金、ちょうだい。」
母　「どんなゲームなの？」
タクヤ「えーっと…」
母　「どんなものか分からないのに買って、好きなゲームじゃなかったらどうするの。後悔先に立たずだよ。よく考えてからにしなさい。」
（引用のため中略）
母　「じゃあ、自分のおこづかいで買ったら？」
タクヤ「えーっ！おこづかいじゃ足りないよ…。おこづかい、もっとちょうだい。」
母　「貯金したらいいじゃない。ちりも積もれば山となる、よ。」

図 2　意味予測に使用した話（第 10 回、一部抜粋）

４．２　ことわざ・慣用句の練習（第 1～10 回）

ことわざ・慣用句の導入後、実際に使えるようになるための練習として、例文・会話・ストーリー作り（4.2.1 節）、ミニスピーチ（4.2.2 節）を行った。

４．２．１　例文・会話・ストーリー作り（第 3, 5, 7, 8 回）

学んだことわざ・慣用句を用いた例文、会話、ストーリーを作成させた。会話作りの際はペアかグループ（3 名程度）で作成、発表させた。ストーリー作りでは、グループ（3 名程度）で 4 コママンガ形式のイラストと、そのイラストに沿ったストーリーを書かせた。

４．２．２　ミニスピーチ（第 2 回）

ことわざ・慣用句を話のテーマとして、自分の経験を 1 分程度で話させた。テーマは「口は災いの元だと思った経験」「頭が痛かった経験」「顔から火が出た経験」の中から 1 つを選ばせた。

【手順】
①グループ（4 名程度）で 1 人ずつ話す
②各グループの代表 1 名がクラス全体に向けて話す

４．３　ことわざビデオ（第 6, 8, 10, 11 回）

実際の場面とことわざ・慣用句を結びつけて使えるようになることを目的に、授業外で行うタスクとして会話ビデオの作成を課した。3～4 名のグループで学んだことわざ・慣用句を用いたスキットを作成しビデオ撮影したものを授業時に視聴、受講生同士で相互評価を行った。ビデオ作成はコース中に 2 回行い、1 回目と 2 回目でグループを組み直した。また、ビデオ中で使用することわざ・慣用句のカテゴリーは、授業で扱ったことわざ・慣用句のカテゴリーに沿って指定した（表 3 を参照）。また、受講生によるビデオの 1 つを

文字化したものを図 3 に示す[5]。

表 3　ことわざビデオ実施要領

	ビデオ視聴回	カテゴリー	グループ数
1 回目	6	体	各回 3 グループ
	8	動物	
2 回目	10	数字	
	11	その他	

（テレビ CM のシーン）

A:「一石二鳥化粧水」は角層深くまで潤って、肌ふっくら。（…聞き取り不可…）。これを使えば美白もなるし、シワも消えるし、ブランドの名前通りにまさに一石二鳥だよ。

（テレビを見ている３人が話している）

BCD:あーいいなぁー

B:ほしい

（中略）

B:でも高いじゃん、１万円もかかるよ。

C:あーそうだね。今月遊びすぎて、これ買ったら１千円しか残ってないよね、私。

B:うーん。

D:あっ、そう言えば、大丈夫じゃない？なんか、来週は奨学金もらえるから。

B:うん。

C:あーそうね。あーどうしようー。１万円も。ほんとに欲しいけど、お金の問題で買うかどうか二の足踏んじゃったよね。

B:でも、大丈夫でしょ。一週間カップラーメン食べたら何とか生きられるよ。

C:カップラーメン…。まぁ、一か八か、買ってみよう。

BD:うん。

（後日）

C:みんな、これ覚えてる？

（中略）

D:覚えてるよ。で、どうだった？

B:よかった？

C:もう全然効かない。

（中略）

C:肌がもっと乾いてるし、ニキビも出てきたのー。

B:あーほんと。やばい。

D:あーそう。

C:もー、どうしよー。もう、A ちゃんの言うこと全部嘘八百だ。これ、いらねぇ、捨てよう。

図 3　受講生によることわざビデオのスクリプト（丸括弧内は稿者による）

４．４　いろはカルタ（第 11 回）

第 11 回の授業は新年最初の授業であり、時期としてもカルタ遊びに適していると考えたことから、江戸いろはカルタを題材に授業を行い、その後カルタ遊びを行った。

【手順】

①「いろはうた」の解説

②江戸いろはカルタのことわざ一覧を提示、既に授業で扱ったものを確認。

③江戸いろはカルタのうち、未習のことわざ 11 句についてカルタの絵札とともに用例を提示、意味を予測させた後、解説。

④教員が読み手となり、グループに分かれてカルタ遊び[6]。

４．５　創作ことわざ（第 12, 13 回）

日本語のことわざの特徴を意識化すること、日本語のことわざにより親しみを持つこと、日本語での創作力を高めることを目的に、ことわざを創作する活動を行った。

【手順】（第 12 回で①～③、第 13 回で④⑤を実施）

①ことわざはどのような時に何を目的として使うものであるかを挙げさせる。

（注意・批判する際に使う、経験から得た知恵や教えを伝える、等）

②日本語のことわざの特徴を考えさせる。教員からも提示。

（七五調のリズムになっているものがある、古い語形が残っている、等）

③創作ことわざについて説明、グループ（3～4 名）に分かれて作成。

:元々あることわざをもじったもの（以下、アレンジことわざ）、完全なるオリジナルのことわざとして作成したもの（以下、オリジナルことわざ）の例を示し、いずれを作成しても良いこととした。

:各グループ最低 2 つのことわざを作成することとした。

④発表（意味と用法の説明・会話実演）

⑤作成したことわざのカルタを作成して提出（カルタは後日作品集として配布）。

受講生による作品の一部を表 4 に示す。意味は発表時の受講生の説明に基づく。なお、想定外の作品として、自国のことわざを翻訳したものが見られた（例:三人の女と一匹の鴨は市場（ベトナムのことわざ））。

表 4　受講生による創作ことわざ（一部）

種別	表現	意味
アレンジことわざ	暖房が仏	冬に暖房がないと困るが、暖房がつくと最高の気分になる
	急がばモノレール	忙しいときにはモノレールが便利で早い
	六人寄れば仕事できぬ	6 人（多くの人）で一緒に何かしようとしてもうまくいかない
オリジナルことわざ	貧富自心	幸不幸を決めるのは（お金持ちかどうか等ではなく）自分自身だ
	～は納豆ごとき	好き嫌いが分かれるものを例える言い方（納豆は好き嫌いが分かれることから）
	休講笑い補講泣き	授業が休講になると嬉しいが、後で補講があるときにその喜びが台無しになる

５．考察

本章では、４章で述べた実践の全体像をまとめ（5.1 節）、次に授業アンケートの結果から受講生の反応を示し（5.2 節）、実践と受講生の反応から明らかとなった課題とよりよい実践に向けた改善案（5.3 節）について述べる。その後、日本語教育におけることわざ・慣用句指導の意義と可能性について考察する（5.4 節）。

５．１　実践の全体像のまとめ

山口(2012)では、ことわざ学習の段階として次の３つが挙げられている。

（１）ことわざの基礎学習…意味を理解し記憶する
（２）ことわざの活用学習…単発的に使うことができる
（３）ことわざの応用学習…状況に応じて使いこなすことができる（山口 2012, p.172）

今回行った実践をこれに当てはめると次のようになり、今回の実践では基礎学習から応用学習にわたる実践を行えたことが分かる。

（１）ことわざの基礎学習…ことわざ・慣用句の導入(4.1 節：ことわざの話、意味予測を含む)、ミニスピーチ(4.2.2 節)、いろはカルタ(4.4 節)
（２）ことわざの活用学習…例文・会話・ストーリー作り(4.2.1 節)
（３）ことわざの応用学習…ことわざビデオ(4.3 節)、創作ことわざ(4.5 節)

なお、ミニスピーチはテーマとなっていることわざの意味を理解した上でそれに関する経験を話す活動であることから（１）に、いろはカルタは新しいことわざの導入も行うため（１）に、創作ことわざは状況に応じた表現を作るため（３）に分類した。

５．２　受講生の反応

コース終盤、二つの授業アンケート（いずれも無記名）を行った。一つは授業実施機関により実施されるものである（回答者 20 名、以下：機関アンケート）。もう一つは発表者作成によるアンケートであり、具体的な授業内容への意見を得る目的で行った（回答者 21 名、以下：自作アンケート）。以下、アンケートから得られた受講生の反応を抜粋して示す[7]。

機関アンケートにおいて、授業の総合評価は「非常に良い」と「良い」で 90%であり、授業に対する全体的な満足度は高かったことが伺える。両アンケートの自由記述欄には、「授業のおかげでたくさんのことわざを勉強できた」「日本の文化や日本人の考え方をより理解できるようになった」「他の先生にことわざを使って通じたのが嬉しかった」「これからことわざを使って話してみたい」等、授業に対する肯定的な意見が見られた。

その一方で、「授業はおもしろいが小テストや発表が多いので大変だと思う」「宿題、小テスト、ビデオが多すぎる」等、授業内容や課題が多いという声も見られた。この記述に

関連し、自作アンケートでは、ことわざビデオの作成回数（2 回）について「ちょうどいい」が 66.7%、「多い」が 33.3%であった。一定数の受講生が授業外でのタスクが多かったと感じていることが分かる。

また、自作アンケートでは、授業であまり役立たなかったと思うことを選ぶ問い（複数選択可）[8]を設けたが、「創作ことわざ」を選んだ回答者が最も多く 6 名、「ことわざビデオ」が 5 名でそれに続いている。理由として前者は「実際に使えない」、後者は「作成に時間がかかる」「皆と予定が合わない」「1 回で十分」が挙げられていた。

５．３　課題と改善案

授業実践と、上述の受講生の反応を通して明らかとなった課題として、次の４つが挙げられる。以下、それぞれについて述べ、今後の実践に向けた改善案を示す。

課題１　ことわざ・慣用句の選定基準
課題２　意味予測の用例作成
課題３　創作ことわざの意義の明確化と実践方法
課題４　受講生への負担

ことわざ・慣用句の選定基準（課題１）については、今回の実践では授業で取り上げることわざ・慣用句の選定を主観的な基準により行った（4.1 節）が、何らかの客観的基準を設定し指導の拠り所とできれば、ことわざ・慣用句指導の意図が明確されると思われる[9]。ただし、指導目的（ことわざ・慣用句を使えるようになるために学ぶ、日本文化の理解のために学ぶ等）により指導すべきことわざは異なると考えられるため、目的に応じて運用できる基準設定であることが望ましいだろう。

意味予測の用例作成（課題２）については、今回の実践で行ったように複数のことわざを盛り込んだ一連の話を作成することは難しく、無理に作成することで、不自然な用法を示しかねないという問題がある。また、ことわざを多用する会話や話は現実的ではない。そこで、まとまった文章や会話例を提示するのではなく、個別のことわざについて短い会話例を提示するなどしそれを用いることによって、自然な用例による意味予測が可能になるだろう。また、そうすることで毎回の授業で意味予測を取り入れることも可能になるだろう。

創作ことわざに関する課題（課題３）として、まず、ことわざを創作することの意義に関することがある。5.2 節で述べたように、授業アンケートにおいて、創作ことわざが役立たなかったと考える受講生がおり、理由として「(作ったことわざを）実際に使えない」ことが挙げられていた。これは、日本人との会話の中で実際に使える知識を学びたいという姿勢であると思われる。より多くの受講生にとって意味ある活動とするためには、日本語で創作することや作った表現について説明することが日本語の練習につながるといったことを受講生に明示しておくことが必要だろう。

また、ことわざの創作方法に関して、今回の実践ではテーマ等を与えず自由に作成させ

たが、結果として自国語のことわざを翻訳した作品が見られたことから、どのように作成してよいか戸惑った受講生がいた可能性が考えられる。庄司(2009)では、創作ことわざの手法として「〇より△」などの型に合わせて創作させる「型はめ創作法」や、「人生」「教育」などのテーマを与えて創作させる「テーマ創作法」が紹介されている。こうした手法を取り入れることで、創作への取りかかりがよりスムーズになると考えられる。

受講生への負担（課題４）については、課題などの負担が多かったことが先述の授業アンケートから明らかとなった。ことわざビデオ（4.2.4 節）作成の全過程を授業外課題としたことが一因として挙げられる。教室内で学んだことを教室外で使用する機会を創出する目的で課題としたが、会話スクリプトは授業時間を利用して作成するといった改善が可能である。十分に時間を取って作成することや、他の受講生や教員からスクリプトへのフィードバックを受けることを通して、より完成度の高いビデオ作成につながる可能性もあるだろう。

５．４．日本語教育におけることわざ・慣用句指導の意義と可能性

ここまで、授業実践について報告し、課題と改善案について述べてきたが、最後に、日本語教育におけることわざ・慣用句指導の意義について考察する。

清水(2014)は、ことわざのレトリック、音、リズムなどを挙げ、日本語の言語的側面から日本語教育におけることわざ教育の意義を述べている。そこで、ここでは、言語的側面での学びという意義を超え、「外国語学習の意義」というレベルで日本語教育におけることわざ教育の意義について述べたい。

鈴木(1973)では、言語と文化は切り離すことができないものであることが述べられ、外国語学習においては「ことばというものが、世界をいかに違った角度、方法で切りとるものか」（p.17）を理解するようになることに意義があると述べられている。つまり、外国語学習とは、単に言語それ自体だけを学んでいるのではないということが指摘できる。日本語教育を含め、外国語教育においては、語彙・文法といった言語的側面の指導と文化的側面の指導は完全に別々に行われるのではなく、言語を学びながら学習言語の文化や社会への理解を深める指導が行われる場合も多いと思われる。

その点から見ると、ことわざ・慣用句は、語彙や文法などのいわゆる言語学習からは知り得ない、社会・文化・考え方といったことについて、言語表現とともに学べるものである。佐竹(2009)にも「ことわざは文化的な背景をもって存在する。ことわざにおける「歴史的・社会的に安定した価値観」とは、その言語社会の文化がもたらしたものであろう。」（p.36）と述べられている。留学生として日本語環境に身を置きながら学ぶ日本語学習者にとっても、日本国外で外国語として日本語を学ぶ学習者にとっても、文化や価値観に密接した表現であることわざ・慣用句を学ぶことには意義があるのではないだろうか。

６．おわりに

以上、中上級レベルの日本語学習者（大学における非正規留学生）を対象とした「ことわざ・慣用句」の授業実践について報告し、日本語教育におけることわざ・慣用句教育の

意義とその可能性について考察してきた。日本語教育の現場では、今回の実践のように半期の授業を通してことわざ・慣用句を指導する機会は少ないと思われるが、様々な科目において部分的に取り入れていくことは可能だろう。

注

[1] 今回の実践においてはことわざ・慣用句の違いを区別していない。ことわざと慣用句は、表現を知らなければ理解・使用ができないという点で共通し、その点を重視したためである。ただし、授業での配布プリントにはことわざに<p>、慣用句に<i>と示し、受講生が関心に応じて確認できるようにした（判別は学研辞書編集部(2014)(2015)による）。なお、ことわざと慣用句の違いについては宮地(1999)が「格言・ことわざ」は「歴史的・社会的に安定した価値観をもつ成句」(p.216)であり、「慣用句」は「格言・ことわざほどの価値観をともなうものではない。そのなかの語句が比喩的・象徴的に用いられ、全体としても単なる連語句ではなくて、派生的な意味を持つにいたった成句である」(p.219)と述べている。

[2] 日本語・日本文化研修留学生は日本語・日本文化に関する分野を主専攻とする学部生を対象とした国費留学生、短期留学生は協定校からの交換留学生である。

[3] 齋藤(2013)の章立てを参考にした。

[4] いずれも対象読者は小学生であり、基本的で広く使われる表現が収録されていると考えた。

[5] 成果物の引用にあたり、受講生の許可を得ている。以下同様。

[6] 「Canon Creative Park」サイト内に無償でダウンロードできる江戸いろはカルタがあり、L版用紙に印刷してカルタとして使用できる。
（http://cp.c-ij.com/jp/contents/CNT-0011856/index.html）

[7] アンケートの全結果は、紙幅の都合で割愛する。

[8] 選択肢は 8 つ（ことわざの説明／プリントの例文／ことわざの話／会話や文を考えること／ことわざビデオ／小テスト／いろはカルタ／創作ことわざ）である。

[9] 清水(2011)では、日本語教育においてことわざを教える際のガイドラインが存在しないことが述べられている。

参考文献

学研辞書編集部(編)(2014)『用例でわかる慣用句辞典　改訂第 2 版』学研教育出版

学研辞書編集部(編)(2015)『用例でわかることわざ辞典　改訂第 2 版』学研教育出版

齋藤孝(2013)『これでカンペキ！マンガでおぼえることわざ・慣用句』岩崎書店

佐竹秀雄(2009)「日本語学とことわざ研究」『国文学解釈と鑑賞』74(12) pp.30-38

汐見稔幸(監修)(2011)『知ってびっくり！ことわざはじまり物語』学研教育出版

清水泰生(2011)「ことわざ・慣用句と日本語教育」日本ことわざ文化学会(編)『教育とことわざ』人間の科学新社 pp.191-204

清水泰生(2014)「ことわざ教育と研究の意義と価値、そして新たなる視点について―日本語研究、日本語教育を中心に」『郷土とことわざ』人間の科学新社 pp.265-282

庄司和晃(2009)「ことわざと教育」『国文学解釈と鑑賞』74(12) pp.130-138

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書

鄭芝淑(2011)「外国語教育の素材としてのことわざ―外国人のための韓国語教育を中心に」日本ことわざ文化学会(編)『教育とことわざ』人間の科学新社 pp.170-190

宮地裕(1999)「第三章　慣用句の表現　一「成句」の分類」『敬語・慣用句表現論―現代語

の文法と表現の研究（二）―』明治書院 pp.214-227
山口政信(2012)「ことわざで物語る（上）―伝承ことわざと創作ことわざのコラボレーション」日本ことわざ文化学会(編)『家族とことわざ』人間の科学新社 pp.166-179
渡邊範道(2011)「自分と自分、自分と社会の接点を探る「創作ことわざ」活用の可能性―高等学校公民科における「ことわざ創り」授業の実践」『教育とことわざ』人間の科学新社 pp.124-135
Canon Creative Park「江戸いろはかるた（読み札）」
http://cp.c-ij.com/jp/contents/CNT-0011856/index.html（アクセス日:2017/12/3）

【資料 1】授業で取り上げたことわざ・慣用句の一覧（自作プリントでの提示順）

回	授業テーマ	ことわざ・慣用句（数）
1	「顔」の ことわざ・慣用句	目の上のたんこぶ／目を奪われる／目の色が変わる／目から鱗が落ちる／鼻が高い／鼻で笑う／耳が痛い／耳にたこができる／壁に耳あり障子に目あり（9）
2		口をとがらせる／口は災いのもと／良薬（は）口に苦し／舌が肥える／舌の根の乾かぬうちに／歯に衣着せぬ／頭が痛い／後ろ髪を引かれる／顔から火が出る／あごを出す（10）
3	「体」の ことわざ・慣用句	首を長くする／肩の荷が下りる／胸をふくらませる／腕が上がる／手に汗（を）握る／手も足も出ない／後ろ指を指される／爪のあかほど／腹を決める／腹を抱える／肝をつぶす／背に腹はかえられない（12）
4		腰が低い／尻が重い／尻に火がつく／膝を正す／（親の）すねをかじる／足が棒になる／足を引っ張る（7）
5	「動物」の ことわざ・慣用句	猫の首に鈴／塞翁が馬／猫の手も借りたい／馬が合う／犬も歩けば棒に当たる／猿も木から落ちる／犬猿の仲／牛の歩み／取らぬ狸の皮算用（9）
6		すずめの涙／鶴の一声／能ある鷹は爪を隠す／鳶が鷹を生む／かえるの子はかえる／泣きっ面に蜂／腹の虫がおさまらない／虫が知らせる／海老で鯛を釣る（9）
7	「数字」の ことわざ・慣用句	一石二鳥／一難去ってまた一難／一か八か／二つ返事で／二の足を踏む／二兎を追う者は一兎をも得ず／二度あることは三度ある／三度目の正直／早起きは三文の得／石の上にも三年／三人寄れば文殊の知恵（11）
8		七転び八起き／五十歩百歩／嘘八百／百聞は一見にしかず／千里の道も一歩から／鶴は千年亀は万年（6）
9	その他の ことわざ・慣用句	朝焼けは雨、夕焼けは晴れ／朝雨に傘いらず／類は友を呼ぶ／嘘も方便／嘘つきは泥棒の始まり／知らぬが仏／住めば都／情けは人のためならず／出る杭は打たれる（9）
10		善は急げ／後悔先に立たず／石橋を叩いて渡る／油を売る／さじを投げる／急がば回れ／ちりも積もれば山となる（7）
11	いろはカルタ	論より証拠／花より団子／念には念を入れ／楽あれば苦あり／喉元過ぎれば熱さ忘れる／鬼に金棒／臭いものに蓋／安物買いの銭失い／頭隠して尻隠さず／油断大敵／貧乏暇なし（11）

【資料 2】授業回別の実践内容

回	授業テーマ	ことわざの話 (4.1.1 節)	例文・会話・ストーリー作り (4.2.1 節)	ことわざビデオ視聴 (4.3 節)	小テスト	その他
1	「顔」のことわざ・慣用句	○				
2						ミニスピーチ（4.2.2 節）
3	「体」のことわざ・慣用句		○			
4						
5	「動物」のことわざ・慣用句	○	○		○	
6				○		
7	「数字」のことわざ・慣用句	○	○		○	
8		○	○	○		
9	その他のことわざ・慣用句	○			○	
10				○		意味予測（4.1.2 節）
11	いろはカルタ			○	○	いろはカルタ（4.4 節）
12	創作ことわざ（4.5 節）					
13						
14	期末試験					
15	総復習					